# 便利屋の気だるい日常。

Arts

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
便利屋の気だるい日常。

【Ｎコード】
Ｎ５１８９Ｏ

【作者名】
Ａｒｔｓ

【あらすじ】
タマムシシティで便利屋で生計を立てる主人公のアイン。
仕事がらトラブルに巻き込まれ安く、様々な出会いと厄介事を通じて成長していく……。

## 1話：サーナイト

俺は船の中にいた。
サント・アンヌ号とかそんな豪華客船じゃないただの貨物船。
しかも、俺がいる部屋は工具等をしまう部屋だったみたいで酷く狭い、そして臭い。
窓なんてあるわけがなく、不規則に揺れる床と潮風の匂いが海の上にいるのだと伝えてくる。

「なぁ、サーナイト。人生って残酷だとは思わないか？」

俺は適当な樽かなんかに腰掛け、向かい側に座るポケモンへと声をかけた。

抱擁ポケモン、サーナイト。主人に忠実であり、容姿、実力共に優れたポケモン故に高い人気を持つポケモンだ。

ドレスに身を包んだ女性の様な姿の彼女は俺が鬱になってると思ったのか優しげに微笑むと、俺を優しく抱きしめてきた。

本当に主人思いの良いポケモンだと思う。
けど俺は別に鬱になってるわけじゃあない。
礼をいって、サーナイトを下がらせても良かったが心地よいのでしばらくこのままでいることにする。

俺は依頼を受け、それをこなす事で報酬を受け取り生計を立てている。所謂、一つの便利屋だ。
仕事の内容は、迷子のポケモンを探したり、要人の護衛など様々。

まぁ、個人運営だから、さほど有名ではなく一日中暇してる時だってある。

話を戻そう、俺に先日貨物船の護衛の依頼が入ってきた。
此処んとこ、ろくな仕事がなく焦燥感を感じてた俺にとって、比較的高報酬である護衛の仕事は願ってもみない事だった。

2つ返事で依頼を受けた俺だったんだが……与えられた部屋はこの狭い、臭い、窓がないの三拍子揃った物置。しかも何かあった時以外この部屋からでるなとキツく命令され、その上食事は自前だと言う。

その状態で3日間、船に揺られてみろ。
鬱通り越して怒りが湧いてくるわ！！

俺の怒りを読み取ったのか、サーナイトはゆったりとしたペースで俺の頭を撫でてくれる。

「海賊でも野生ポケモンでも良いから出てこいよ」

サーナイトに頭を撫でられながら、ポツリと呟く。
ここ3日間、船はなんの支障もなく航海を続けている。

そりゃ、何事もなく航海を終えても報酬はいつも通り貰えるから、俺に損は無いんだけど、それはちょっと張り合いがない。

そんな事を思っていると勢いよく扉が開き、血相を変えた船乗りが此方を見据えていた。

「あ、あ、あんた！！た、大変なんだ！！船が海賊でポケモンは！

！」

サーナイトの胸から頭を話すと無言で、船乗りの頭に拳骨を降り下ろす。

「あだっ！！」

頭を押さえて踞る船乗り。少し強すぎたか？落ち着かせようと想っただけなんだが……喋るのも辛そうだ。

まぁ、いいや。

「緊急事態なら外に出ていいんだよな？」

船乗りが痛みから回復するのを待つのもめんどくさいので船乗りに確認を取る。

船乗りは無言で片手で頭を押さえながら、通路の奥を指を指す。

たしか、あそこは甲板に繋がってた筈だ。

「来い、サーナイト！！」

俺はもう船乗りに目もくれず、甲板に向けて走り出した。

## 1話：サーナイト（後書き）

はじめまして、Ａｒｔｓと申します。
小説を書くのは始めてですが皆様の素晴らしい作品に刺激され、駄文を綴りたい衝動にかられました。

初心者で拙い所だらけでしょうが、ご指導よろしくお願いします。

## 2話：オクタン

「まだ、残ってやがったのか」

やっぱり、さっきの船乗りの言葉から海賊の単語が出たからもしかしてと思ったんだ。
甲板に出れば、ガラの悪い男達が船乗り達を拘束して一ヶ所に集めているところだった。

俺とサーナイトに気づいた、男の一人がニヤニヤ笑いながら口を開いた。

「おい、坊主。ポケモン置いて大人しくしな。そしたら痛い目見なくて済むからよ。」

男の言葉を無視して、俺は観察を始める。
海賊の数は5人、船内にいるのを含めても１０人を超えることはないだろう。極めて小規模な海賊だ。

まぁ、狙いはこの船に積まれた荷物と見て間違いないな。

「おい、聞いてんのか！！」

話を無視された海賊は、顔を真っ赤にして俺を睨み付ける。タコみたいな顔してんのもあって、なんだかオクタンみたいだ。よし、こいつの呼び名はオクタン顔としよう。

「……なぁ。」

俺はオクタン顔に声をかける。

「んだ？おとなしくする気になったか？」

「取り引きしないか？」

「取り引きだぁ？」

俺の言葉を聞いたオクタン顔は下品な笑い声を上げる。それを見た他の海賊達も同じ様に笑い声を上げた。

「馬鹿か？お前。取り引きってのはお互いに利益があって成立するもんだ。俺らにはお前と取り引きする利点がねぇじゃねぇか」

それは重々承知しているさ。俺はポーカーフェイスのまま、ロングコートを広げる。

ロングコートで隠れていたベルトの両側には、モンスターボールが３つ太陽の光を浴び輝いていた。

モンスターボールを見た海賊達は急に静まる。

「……見ての通り、俺にはポケモンが後５匹いる。サーナイトを合わせて６匹に一気に命令すりゃあこの船なんて人溜まりもない。そしたら、あんたらの目的の荷物もあんたらも無事ではすまない」

まぁ、そんなめんどくさい事しないが。貪欲な海賊は荷物を見捨てるなんて事は出来ないだろう。俺は隣のサーナイトに視線をやれば海賊達の返事を待つ。

「取り引きの内容は？」

ほら、食いついてきた。

「俺とそっちの誰かがポケモンバトルをする。俺が勝てば船乗り達を解放して去れ。お前らが勝てば好きにしてくれて構わない」

「……面白れぇじゃねぇか。おい、誰か審判しろ！！」

どうやら、相手をするのはオクタン顔らしい。

さて、３日間缶詰だったからな。いっちょ、暴れるか。

## 2話：オクタン（後書き）

次回はようやくバトル。
そして主人公の名前を明かす機会を早めに作りたい！！

## 3話：シザリガー

「使用ポケモンは互いに一体。どちらかが戦闘不能に陥った時点で勝敗が決まります！！」

審判役を買ってでた船乗りが俺とオクタン顔互いの顔を見やる。

「それでは勝負開始！！」

審判が手を上げると同時に俺らはポケモンを繰り出す。

「いけるな？サーナイト」

サーナイトは無言で微笑むと、前に進み出る。

「行きやがれ！！シザリガー！！」

オクタン顔が出したのはシザリガー。気性が荒い事で有名なザリガニの様な姿のポケモンだ。

シザリガーのタイプは水と悪。エスパータイプのサーナイトにとっては、エスパー技を無効化する悪タイプは天敵だ。

「こりゃ、勝負ついてんじゃねぇのか？」

「おい、さっさと決めちまえよー」

周りの野次が五月蝿い、ポケモンバトルは相性で決着がつくほど甘くねぇ。

「シザリガー、辻斬りだ！！」

「シザー！！」

やっぱ、セオリー通りに弱点をついてくるか……。
発達した脚を使い、予想以上のスピードでサーナイトに迫るシザリガー。
シザリガーって意外に速いのな。

だがサーナイトが対応出来ない速さじゃない。
サーナイトは胸の辺りに両手をやり生み出した、電撃を迫り来るシザリガーに向けて放つ。

「シザリガー、辻斬りを中断して守れ！！」

シザリガーは脚を止めると、大きな鋏で電撃を受け止める。
流石に弱点の技を正面から喰らうほど馬鹿じゃないらしい。

守りの動作から回復するにはしばらく時間がかかるその間にサーナイトは自己強化の為に瞳を閉じて集中する。

「シザリガー、今サーナイトは無防備だ。ハサミギロチン！！」

素早く、守りの動作から回復したシザリガーがサーナイトを鋭利な鋏で両断しようと肉薄し鋏を伸ばす。

「へへっ？どうした？指示が出てなくてポケモンが自分で戦ってるじゃねぇか」

勝利を確信したのか、オクタン顔がニヤニヤ此方をからかい始めた。

ハサミギロチンは一撃必殺の技、瞳を閉じて視界を閉ざしているサーナイトにとっては避けるのは至難の技であろう。

しかし、シザリガーの鋏をサーナイトは瞳を閉じたまま右へステップして避けた。

「何！？もう一度ハサミギロチンだ！！シザリガー！！」

偶然だと思ったオクタン顔は再び一撃必殺の技を出すように自らのポケモンに指示を飛ばす。

しかし、サーナイトは鋏が近づくたびに難なく避けていく。

瞳を閉じているのに、まるで見えているかのように。

「シザリガー！！何でもいい！！とにかく当てろ！！」

流石に焦ってきたのか、それとも目を閉じていながらも攻撃を避け続けるサーナイトに恐怖を感じたのかオクタン顔の指示が適当な物に変わっていく。

シザリガーは出が遅く隙の多い一撃必殺の技を諦めて。サーナイトの弱点である悪タイプの辻斬りを連続して繰り出す。

それでもサーナイトはまるで踊っているかのように辻斬りの軌道を避け続ける。

「何で視界を閉ざしているサーナイトが攻撃を避けれるのか教えてやろうか？」

そろそろ飽きてきたし、種明かしでもしようか。

「何だと！？」

「サーナイトの特性の一つがシンクロ。対象の感性と同調したり、状態異常を写したりと用途は様々。今のサーナイトは俺の視界とシンクロしてるんだよ」

つまり、サーナイト自身は瞳を閉ざし自己強化に集中していても、俺が見ている光景が頭に流れ込んでくる。
つまりサーナイトは見えているのと同じ状況というわけだ。

後、俺はサーナイトに指示を出してないわけじゃない。口に出してないだけだ。
思考を感じることが出来るサーナイトは俺が口に出さずとも思ったことを感知し、行動に移してくれる。
これ結構便利だ。

「何だよ、それ卑怯じゃねぇか！！」

「ポケモンの特徴を生かしてるだけだ。」

オクタン顔に言い捨てれば、サーナイトに勝負を終わらせるように念じる。

すぐにサーナイトは瞳を開け、長い瞑想の電撃というよりは雷撃にちかい１０万ボルトを放ち、シザリガーを黒焦げにした。

「シザリガー、戦闘不能。勝負あり」

いつの間にか勝負に呑まれ沈黙していた、船乗り達が歓喜の声を上

げる。

「さて、約束は守れよ」

## 3話：シザリガー（後書き）

バトル描写って難しい。
どうやったら上手く書けるかな。

ご意見感想お待ちしております。

## 4話：クチート

「五月蝿ぇ！！おい、てめぇらやっちまえ！！」

これも予想通り。

約束を守る保証なんてないしな。勝負に負けたら、一斉に襲いかかってくるだろうと思ってたさ。

自分達のポケモンを出してジリジリと距離を積めてくる海賊達。

「囲まれちまったか……サーナイトだけじゃ分が悪いな」

そう言って俺はベルトの左右に付けられたモンスターボールの内、1つを手に取る。

「出番だ、クチート」

出てきたのは1mにも満たない、小さな人型のポケモン。

欺きポケモンのクチートだ。

どんな強力なポケモンを出してくるのかと身構えていた海賊だが、出てきたのがクチートだと分かればニヤニヤと意地汚い笑みへと戻る。

……コイツの恐ろしさ知らねぇな。

「やっちまえー！！」

新しくサメハダーを出したオクタン顔の掛け声と共に海賊達のポケ

モンが一斉に飛びかかってきた。

「クチート……死なない程度にな」

クチートにそれだけ伝えると、クチートは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

勝負は一瞬だった。

サーナイトがサイコキネシスで一塊にしたポケモンをクチートが見た目に反する破壊力のギガインパクトで一撃でポケモン達を気絶させたのだ。

「へっ？」

海賊達は目の前の光景が信じられない様だ。無理もない、自分達のポケモンの体長の半分もないポケモンに一撃で決着をつけられたのだから。

「クチート、冷凍ビーム。凍らせるのは足だけだぞ」

クチートの角の一部が変化したといわれるクチートの大顎。

可愛らしい見た目のクチートには不釣り合いなほど狂暴そうな大顎から冷凍ビームが放たれると、未だに呆然としている海賊達の脚を凍らせる事により拘束に成功した。

海賊達も観念したのか、自分達のポケモンをボールへ戻し大人しくなった。

「ありがとな、クチート」

「クチクチ～♪」

しゃがみこんで頭を撫でてやると、嬉しそうに鳴き声を上げて俺の手にじゃれてきた。

「サーナイトもサンキュー」

顔だけサーナイトの方に向けて礼の言葉を述べると何時ものように無言で微笑んできた。

さて、後は船乗り達を助け出したら一息つけるか……。

俺はサーナイトとクチートを引き連れ、縛られている船乗りの元に向かった。

## ４話：クチート（後書き）

グダグダですね。
そして４話終わっても主人公の描写がないｏｒｚ

## 5話：オニスズメ

チュンチュンとオニスズメのさえずりが聞こえる中俺は目を覚ました。
どうやら、事務仕事の最中に寝てしまったらしい。
貨物船の護衛を終えた俺は報酬を受けとるやすぐに、事務所へと戻っていた。
椅子から立ち上がると、窓からそとの様子を何気なく見つめた。
会社員や、登校途中の学生等で何だか忙しない。
俺の事務所はカントー地方のタマムシシティにある。
事務所といってもそんな立派なもんじゃない、目立たないとこにあるビルの部屋を借りてるだけ。
部屋は8畳ほどの大きさで、おまけ程度に簡易キッチンがついてる。
自宅も兼用してる俺としちゃあ、簡易キッチンは嬉しい限りだが。
椅子に再び腰掛け、仕事机に脚をのせるながら、しつこくへばりついてくる眠気を拭うためコーヒーでも飲もうかと思い始めた時にコッと小さな音がした。
見るとおぼんを持ったサーナイトがコーヒーを机に置いてくれてるとこだった。
もぅ、大好きだサーナイト。お前良いお嫁さんになるよ、やらんけど。

ありがと、と短く礼を言うとサーナイトの淹れてくれたコーヒーを手に取った。
鼻を擽る何とも言えない香ばしい香りに表情を緩ませながら一口。
うん、美味い。
すっかりとした苦味がベトベトンの様に絡んでいた眠気を吹き飛ばしてくれた。

「クチ～♪」

可愛らしい鳴き声に視線を下に向けると、両手を一生懸命伸ばしているクチートがいた。どうやら、膝に乗せろという事らしい。

クチートを膝に乗せながら、そういえば帰ってきてクチートをボールに戻すのを忘れていたなぁと思い出す。
別に困る事じゃないから良いんだが……。
「クチクチ～♪」

何やら機嫌良さそうなクチート。
見るとサーナイトにホットミルクを貰っていた。

両手でマグカップを持ち、小さな口にホットミルクを運ぶクチート。
時折、満足そうに笑顔を浮かべるクチートを、俺はサーナイトと共に微笑みながら見つめていた。

それにしても……暇だなぁ。

## 5話：オニスズメ（後書き）

連続投稿。
サーナイト綺麗ですよね、クチート可愛いですよね、ね！！
感想等頂けたら励みになります。

## 6話：フーディン

暇に耐えれなくなった俺はクチートを肩に乗せて街を歩いていた。
周りの視線が少し痛い。
そりゃ、そうだ。ロングコート着たいい年したオッサンが肩にクチート乗せてあるいてんだもん、ギャップありすぎて目引くわな。

「〜♪〜♪」

そんな事など気にしていない様子のクチートは久しぶりの散歩にご満悦の様だ。
まぁ、散歩するとしてもいつもはサーナイト連れてるからな（今回はサーナイトはボールの中だ）

「ん？」

何やら喧騒が聞こえる。
声の方を見ると野次馬が出来ていた。どうやらポケモンバトルをしているらしい。

朝っぱらからよくやるよなぁと思いながら、暇なんで俺も野次馬の一人になる。

「フーディン、気合い玉です」

「ルカァアア！！」

「ルカリオ！！」

何だか変な服着た奴と、つり目が印象的な少女が戦っていた。
変な服のポケモンはフーディン、少女のポケモンはルカリオだ。
勝負は少女の負けのようだが……。

何かおかしい。

「おい、もう止めろよ！！私の敗けだって」
少女は倒れたルカリオに駆け寄り、涙が溢れた目で相手を睨み付ける。

「ならば、賞金として貴女のポケモンを戴きましょうか」

「何でだよ！！そんなこと最初は言って無かったじゃんか」

「勝者の特権ですよ、おわかりいただけないなら……フーディンやりなさい」

「フー！！」

「止めてよぉ……」

トレーナーの指示でフーディンの手元に再び気合い玉が出現する。

チッ、胸糞わりぃ。
こいつらも止めねぇのかよ、俺は役に立たない野次馬をかき分けながら前に出た。

「クチート、噛み砕く」

「クーチッ！！」

俺の肩から飛び出したクチートは発達した大顎でフーディンの肩に食らいつく。

「フーディン！！何者です！！」

「通りすがりの便利屋さ」

俺はサーナイトを出して、倒れたルカリオの治療に向かわせる。

「アンタ、ちょっとおかしんでない？人の物を盗ったら泥棒ってママに教わらなかった？」

「黙りなさい。私たちロケット団に歯向かってただで済むと思ってるんですか？」

思い出した。変な服には大きくRって書かれてる。コイツら最近騒がれてるバカ集団だ。

「タダじゃすまないって金でもくれんのか？」

「キーッ！！お前たちコイツをコテンパンにしちゃいなさい」

ヒステリックに叫んだロケット団の声に応じて野次馬の中から二人ロケット団が現れた。どうやら、したっぱじゃあないようだこのロケット団。

応援に駆けつけたロケット団が繰り出したのはエアームドとダーテング、それに今クチートが食らいついてるフーディンを合わせて３

体のポケモンが此方を睨んでいた。フーディンはすぐにクチートの対応に視線を外したが。

フーディンはクチートに任せるとして、前の2体を相手にしないといけない。サーナイトはルカリオの治療にあたってるし。

「おい、あんた。大丈夫なのか？」

声に振り向くとつり目少女が此方を見つめていた。俺がポケモンを出さないのを心配してくれてるのだろう。

「アタシ、まだポケモンいるから手伝うよ」

そう言ってモンスターボールを見せる少女。
その手が震えてるのに気づかないのか？
自分のポケモンが奪われるかもしれない恐怖と必死に戦っているのだろう。まだこんな子供に恐い思いさせやがって……少し灸を据える必要があるな。

「いや、いい。お前さんはルカリオの近くにいてやんな」

俺は少女の肩を叩くと、ルカリオの方へ押しやった。

「覚悟は出来ましたか？」

フーディンが必死に戦ってるのに勝利を確信してるのか、視線すらやらないロケット団。
フーディン、大事なスプーン噛み砕かれてリアルに焦ってんのに……はたから見ると面白いな。

「あぁ、待たせたな。行け！！」

俺はボールを投げ、ポケモンを繰り出した。

## 6話：フーディン（後書き）

六話まできて主人公の名前が明らかになってない話って、多分この小説だけ。

## 7話：アバゴーラ

俺が出したポケモンはアバゴーラ。
鎧を纏った海亀のようなポケモンだ。

サーナイトの治療を受けているルカリオの姿をチラリと見たアバゴーラは状況を理解したのかヒレとなっている腕を掲げて相手を威嚇した。

「エアームド、鋼の翼」

「ダーテング、騙し討ちだ！！」

此方の準備が整ったとを見計らったかのように同時に攻撃を行ってくるロケット団のポケモン達。

「アバゴーラ、鉄壁で耐えてからダーテングに冷凍ビーム。」

アバゴーラは俺の指示通り身体を纏う鎧を硬質化させるとエアームドとダーテングの攻撃を弾き返した。
元から防御力に優れたポケモンだ、鉄壁でさらに防御力を上げた今のアバゴーラはそう簡単には落とせない。

「アーバッ！！」

続けざまにアバゴーラの口から放たれた冷気の槍はダーテングを貫くとそのまま氷像と化した。
上手いこと凍ってくれたみたいだ。

ダーテングの持ち主の悲痛な叫びを聞きながら俺は上空を旋回しているエアームドに向き直る。

「エアームド、まきびしで相手の動きを塞げ」

「アバゴーラ、挑発」

エアームドが飛びながら放ってくるまきびしは少々厄介だ。
だってほら、片づけが大変だろ？
小細工をさせないために、アバゴーラに挑発を指示する。

上手いこと挑発に乗ってくれたエアームドは怒りを露にしながらアバゴーラに向かって一直線に向かってきた。
「今だ、アバゴーラ。ストーンエッジ」

「アーバッゴゥラァァァ！！」

充分引き付けた所でアバゴーラはエアームドにヒレの先に作り出した石刃を叩きつけた。
「エアァァ……」

地面にめり込み、目を回したエアームドを確認すれば俺はロケット団に向き直る。

「で？まだやるかい？」

「い、いきなさいフーディン」

「残念ながらフーディンは俺のクチートの尻の下だ」

目を回して倒れたフーディンに腰掛け、楽しそうにフーディンの髭を引っ張るクチート。

その光景をみたロケット団達から血の気が引いていく。

「お、覚えてなさい！！」

悪役って必ずあのセリフ言うよなぁと思いながら、自分達のポケモンを戻して逃げていくロケット団を見送った。

## 7話：アバゴーラ（後書き）

間違えて消しちゃったので書き直しました。

内容も若干変わっております。ごめんよ、キリキザン。

ご意見ご感想お待ちしております。

## 8話：ルカリオ

「サンキュー、アバゴーラ。楽しかったか？」

「アバ」

コクリと頷いたアバゴーラの頭を撫でてからボールに戻す。久しぶりのバトルをアバゴーラは楽しんでくれたみたいだ。そう言った意味ではロケット団に感謝しないとな。

「クッチ、クッチィ」

抱っこ、抱っこと言っているかのように、両手を上げて無くクチートを抱き上げそのまま肩に乗せると、サーナイトを迎えに倒れたルカリオの元へ行く。

サーナイトの治療もあってかルカリオは立ち上がれるまでに回復していた。

「あんた……あの、その……助けてくれてありがとうございました。」

へぇ、強がりのガキんちょだと思ってたけど、礼儀は弁えてるみたいだな。

「気にするな、サーナイト行くぞ」

肩に乗っているクチートが暇なのか、先ほどのフーディンの髭を引っ張ていた名残か、髪を引っ張りだしたんで、ポケットからオレン

の実を取り出してやる。
食ってるうちは大人しくなるだろう。
「アタシ、レイファっていうんだ。あんた名前は？」
「……アイン」
偽名だが俺は自らの名前を少女……レイファに告げる。昔の名前はもう捨てたし、仕事でもこの名前を使ってるからか本名よりこっちのがしっくりくる。
「アインさん、あんたを見込んで頼みがあるんだけど……」
「稽古つけてくれとかだったら断る」
どうせ、ガキの言うことなんてそんなとこだろう。俺はサーナイトを労いながら即答した。
「ダメなのか？」
ほら、見ろ。駄目だぞ、そんな潤んだ瞳でおじさん揺るぎませんよ。直視できないけど……。
「俺は金にならない事はしないからな」
「そうか、あんた便利屋だったな。じゃあ、アタシがあんたを雇う。それなら良いだろ？」
「あのな、おじさんガキんちょの小遣いで動くほど暇じゃ――」

「あんたも本業が忙しいだろうから、気が向いた時でいいから。報酬はその都度払うよ。これアタシの住所と連絡先。じゃあアタシ、ルカリオをポケモンセンターに連れてくから。今日はホントにありがとなー！！」

いつの間にかレイファのペースに呑まれてたんだが……レイファは俺にメモを押し付け、ルカリオをボールに戻すと走り去っていった。

なんだか、騒がしい奴だ。

……帰るか。

## 8話：ルカリオ（後書き）

えーっ、突然ですが企画的な事をしたいと思います。
今回ようやく名前が明らかになった主人公アインへの依頼を募集します。

依頼内容：

依頼主：（作者様でもある方はご自身の小説のキャラ様でも可能です）

依頼主容姿：

報酬：

備考：（〜と戦ってほしい。依頼の成功か否か）

こんなとこですかね？
募集期間はとりあえず無期限とします。
応募があった順に書いていくとは限りませんのでご了承よろしくお願い致します。

応募お待ちしております。

## 9話：コイキング

数日後、俺はレイファに渡された住所を訪れていた。

この数日まったく仕事がなかった為、金銭面的にヤバかった時にレイファの事を思い出したからだ。

子供の依頼だから報酬には期待できないが、今の状況では仕事を選ぶような贅沢な事は出来ないからな。

そして、呆然としていた。

目の前に佇む巨大な木製の門、門にそってぐるりと走る石壁。

奥に見える和風総本家といった感じの屋敷が見える。

もしかしたら、筋の人の家なのか？

おれは驚愕故にだらしなく開いた口を閉じると、住所と一緒に貰ったレイファの連絡先へ電話をかける。

家の前を彷徨いて不審者に間違えられるのは勘弁だ。

本当にその筋の人に目をつけられたら嫌だし、てか恐いし。

「あぁ……俺だ、アインだ。今家の前にいる」

「アインさん！！来てくれたのか？」

電話越しのレイファは嬉しそうな声を上げる。

興奮してるのか、少々声がでかい。
「俺はどうすりゃ良いんだ？」
「待ってて、今若い衆に開けさせるから」
若い衆となっ！？
マジでその筋の人出てくるのか！？
もちろん、そんな事はなく。しばらくすると門が開き着物を来た上品そうな女性が、これまた上品な笑顔を浮かべていた。
「アイン様ですか？」
「あぁ」
「此方です。足元にお気をつけください」
女性に案内されるがまま、屋敷に足を踏み入れる俺。
中に入ってこれまた驚いた。
俺に学は無いから上手いこと言えないが、庭園がスゴい。俺は移動しながら庭に目を奪われた。
紅葉の樹が等間隔で生え、落ち着いた紅を庭に写し出しており。
縁側の近くの池には鹿威しはもちろん、コイキングが元気そうに泳いでいた。
ジョウト地方のエンジュシティにも同じ様に美しい庭園があった気

がする。

こりゃ、報酬も期待できるかも。

俺がそう考えていると、目の前の女性が足を止めた。

「此方です。」

頭を下げながら、障子を指す女性。

俺はありがとと紡げば障子を開け放った。

## 9話：コイキング（後書き）

小説を書くのって難しいと思い直したＡｒｔｓです。
他の素晴らしい先生方に心底憧れます。

## 10話：レントラー

そこにはレイファは居らず、その代わりに黒の羽織を着た男性と黄色の着物を来た女性がいた。

不機嫌そうな男性の放つ重々しい雰囲気に、障子を開けるときにノックでもするべきだったかと思うが障子にノックなど聞いたことがない。

何か男性の機嫌を損ねる様なことしたかと自答していると黄色の着物の女性が声をかけてきた。

「貴方がアインさんですね。先日は妹を助けていただきありがとうございました。」

上品な笑顔で頭を下げてくる女性。

「レイファの姉さんでしたか、妹さんからは想像できないお上品さで」

……なんて言えるわけがないので、軽く頭を下げるだけに留めておく。

「私、レイファの姉のエリカと申します。若輩ながらこの街でジムリーダーを勤めさせていただいております」

「そうなんですか？」

エリカと言う名前は聞いたことがある、タマムシシティのジムリー

ダーだったとは思わなかったが。
……別に俺が無知な訳じゃないぞ、興味が無いから知ろうとしなかっただけだ。本当だぞ？
「エリカ、客人に茶と茶菓子を持ってきなさい」
不意に、黙り込んでレントラーの様な鋭い視線を俺に向けていた（俺は華麗にスルーだ）男性が口を開いた。
「ふふふ……分かりましたわ、兄様」
何やら楽しそうなエリカさんは意味深な微笑みを残して出ていってしまった。
「……」
「……」
「……」
「……」
予想通りの気まずさだ。エリカさんの存在がどれほど場を和やかにしていたのかが分かる。
「アイン……君といったね」
腹に響き渡る重低音っ。急に話しかけられると驚くな。
「兄のリンドウだ。妹を助けてくれて感謝する」

深く頭を下げるリンドウさん。威圧感漂わせながら頭を下げる人は始めて見たかもしれない。

「気にしないで下さい」

此方も軽く頭を下げる。

「すまないね、レイファに会いに来たろうにこんな所に呼び出してしまって。」

僅かに口元がヒクつくリンドウさん、もしかしたら微笑んでるのか？

「妹を助けてくれた事を直接礼を言いたいという事もあったんだが、聞けばレイファが君に教えを乞いたと言うじゃないか」

「まぁ、成り行きでそうなりそうで」

「レイファはエリカにも私にも教えを乞う様なことはしなかった。それでレイファが見込んだ男をこの目で見ておこうと思ったんだよ。」

あれ？リンドウさんって意外といい人？

「だが！！」

油断してたからリンドウさんの大声に肩が跳ねた。この人心臓に悪いわ。

「だからといって、長いバトルの歴史を持つ我ヶ家が余所者にバト

ルを習うのを認めるわけにはいかないのだ。」
おっと、リンドウさんはレイファに俺が介入するのが反対のわけだ。
反論しようかと思ったが、リンドウさんの言う通り所詮おれは余所者。
リンドウさん……いやレイファの家にそう言った理由があるなら引かざるをえないだろう。
とりあえず何でもいいから、食いぶちを探さないとな。
「分かりました、それなら仕方ないですね。失礼し――」
適当な事を言ってその場を去ろうとしたが、新たな乱入者に言葉を遮られた。
「ちょっと待った！！」
「レイファ！？」
障子を乱暴に開け放ったのはレイファだった。
「兄貴、何かってに話決めてんだよ。家の事なんて知らねぇ、アタシはこの人にポケモンを習いたいんだ」
ズカズカとレイセンさんの前まで来て、抗議するレイファ。
この威圧感に怯まないとは……長く一緒にいると慣れるもんかね？
威圧感って。
「レイファ、お前もこの家の人間なら分かるだろう？余所者に教え

を乞う事がどれほど恥な事か」

「兄貴は直ぐそれだよ、家の事を引き合いに出してさ」

こいつら完全に俺の事を忘れて喧嘩してるな……。

「とにかく何処の馬の骨とも分からぬ奴にレイファを任してはおけん！！」

ちょっと今のはカチンときたぞ。俺は沈黙を決め込んでいたが、思い腰を上げる。

「それなら簡単ですわ、私と兄様、レイファとアインさんでバトルをしましょう。それで勝った方の言い分を聞けばよろしいのでは無いでしょうか？」

今のは俺じゃないからな。

というかエリカさんいつの間に部屋に戻ってたんだ？

「なんで、ダブルバトルなんだ？エリカ姉」

「もちろん、私もバトルしたいからですわ」

「良いだろう、今日は遅い。明日の早朝勝負をつけよう。泊まってゆくがいい、アイン君」

言葉だけを聞けば提案の様だが、リンドウさんの言葉は有無を言わさぬものが込められていた。

## １０話：レントラー（後書き）

まさかのエリカ様登場です。
かなりのオリジナル要素が含まれてますがね。

そして新キャラのリンドウ登場。
ＣＶは子安さんのイメージです（笑）

## 11話：ミロカロス

「ごめんな、アインさん。家の馬鹿兄貴が」

俺はレイファに案内された客間でレイファと話し込んでいた。

あの重圧に逆らう程、命知らずじゃないからな。

「気にすんな、一騒動あるのは覚悟してたからな。バトルすることになるのは予想外だったが……」

「あはは……エリカ姉って大人しそうに見えて戦闘狂だから」

「なんだか物騒な物言いだな」

今更ながら気づいたが、レイファは昨日のTシャツにジーンズといったラフな恰好ではなく、着物を纏っていた。

きちんと髪を結い上げ、紅に金でミロカロスが刺繍がされた着物を着たレイファは……まぁ、そのなんだ？可愛かった。

「ん？アタシになんか着いてるか？」

「……いや、それにしてもお前がジムリーダーの妹だったとはな。少し驚いた」

「あはは、まぁね。アタシ自体はポケモンも強く無いから完全に七光りなんだけどね」

いかん、いかん。自然と見とれていた様だ。慌てて平静を装ったが、普通にバレてはいないようだった。

「それよりさ、アインさん。作戦決めよーぜ作戦」

「明日のか？」

「おぅ、エリカ姉は知っての通りジムリーダーだし、馬鹿兄貴は元四天王だったらしいんだ」

「らしい？」

「エリカ姉から聞いただけだから今一確信がなくてさ。兄貴、自分の事喋りたがらないから」

まぁ、何にせよ。ジムリーダーにそこまで言わせるんだから一筋縄ではいかないだろう。

「二人がどんなポケモン使ってくるとか、心当たり無いのか？」

負けると安定した仕事を失うことになるからな、俺も少しは本気になる。

「エリカ姉は草タイプだよ、それは確定。問題は馬鹿兄貴の方。アタシも何度か戦ったことあるけどポケモンのタイプはバラバラだった」

エリカさんは草対策をしていれば何とかなるだろう。

問題はリンドウさんの方、使用してくるポケモンの予想がつかないとなれば、単純にお互いのポケモンの力のぶつかり合いとなる。

流石に元四天王とまで言われる実力者に真っ向から勝負を挑んでも勝てる気がしない。

「ちなみに戦ったことのあるポケモンってのは？」

「覚えてる限りだと、マンムーにドラピオン……後ミロカロスもいた」

「そうか、うーん」

見事にバラバラだな。

多分、用心深そうなリンドウさんの事だからレイファに知られている前述のポケモンを使用してくる可能性は低いだろう。

まぁ、リンドウさんが何匹ポケモンを連れているから先の情報から使用ポケモンを特定するのは難しいか。

コイツを使うしかないか……。

俺はそっと腰のモンスターボールに触れる。

俺の気持ちを感じ取ったのか、カタカタとモンスターボールを揺らす。

「レイファ、お前はエリカさんの対策だけを考えろ。リンドウさんは俺が何とかするから」

「ん、分かった」

コイツはなるべく出したく無かったんだが……仕方がない、コイツなら元四天王のポケモンをも圧倒できる。

エリカさんに指定されたルールは４対４のダブルバトル。
さて、どうなる事やら。
レイファのポケモンを選出しながら夜は更けていった。

## １１話：ミロカロス（後書き）

もう少ししたらキャラクターのプロフィールを纏めようと思います。

企画の方も募集中なのでよろしくお願い致しますね。

## 12話：ボスゴドラ

早朝、俺はレイファと共に、備え付けらしいバトルフィールドに向かう。
既にエリカさんとリンドウさんは位置について此方を待っていた。

「それでは、エリカ、リンドウ対レイファ、アインのバトルを始めます。ルールは交代なし、4対4のダブルバトル。では、双方最初のポケモンを出してください」

俺がリンドウさんの前に、レイファがエリカの前に立つ。
俺らの準備が整えば、審判らしい女性（昨日、部屋まで案内してくれた大和撫子だ）が凛とした声で宣言する。

「行って、ゴウカザル！！」

「ゴーカ！！」

「クチート、任せたぜ」

「クチ～♪」

「華麗に舞いなさい、キレイハナ」

「ハナハナ～♪」

「吼えろ、ボスゴドラ」

「ゴラゥアアアァァ！！」

お互いが最初のポケモンを繰り出す。
レイファが出したのはゴウカザル、シンオウ地方の御三家であるヒコザルの最終進化系だ。ゴウカザルのタイプは火と格闘、エリカさんの使用する草タイプの弱点をつくことができる。セオリー通りだが間違いはない。

ゴウカザルの方もやる気は充分で、頭の炎が勢いよく燃えていた。
レイファの出したゴウカザルと対するのは、キレイハナ。
クチートよりも小さな体躯をしているが、その小さな中に中々強力な能力を秘めている。
登場と同時にフラダンスに似た踊りを始めるキレイハナ。……可愛い。

俺が出したのはクチート。クチートは御世辞にも高い種族値とは言えずに、バトルにはあまり向いていない。しかし、このクチートは潜在能力が高く俺の主力となっている。この前、実際に指示なしでフーディンを倒してるしな。

キレイハナのダンスが気になったのか見まねでフラダンスを始めるクチート。ヤバい、めちゃくちゃ可愛いっ。

クチートに対するのはリンドウさんの繰り出したボスゴドラ。
ゴウカザルのタイプである格闘タイプで4倍弱点を狙えるのは嬉しい誤算だ。
しかし、トレーナーと同じく威厳ある風貌と覇気がそう簡単に倒せるものではないと物語る。
先発でこれとはリンドウさんが何を2匹目に控えさせているのかがすごく気になる。

「始めっ！！」

大和撫子の合図で最初に動いたのはレイファだ。

「ゴウカザル、キレイハナに火炎車！！」

「ゴゥカァァァ！！」

火炎を纏い回転し始めたゴウカザルは火炎車となりそのままキレイハナに向けて突っ込んでいく。

草タイプの弱点の炎タイプの一致技だ。

直撃すれば大ダメージは免れないはずだ。

何かしら防御の形をとってくると踏んで、それを打ち崩す様な技をクチートに出す……なんてセオリー通りの事はしない。

これが、もし2対1ならばその選択はベストなものだろう。

だが、これはダブルバトルだ。

「キレイハナ、日本晴れですわ」

「えっ？避けない！？」

レイファが驚いたような声をあげる、どうやらキレイハナが避けると思っていたらしい。

「ボスゴドラ、鉄壁で受け止めろ」

ボスゴドラが見た目に反した素早い動きでキレイハナを守る城壁と化す。

鉄壁で更に強度が上がった堅固な頭でゴウカザルの回転を無理矢理止めた。

「ゴカッ！？」

火炎車から本来の姿へと強制的に戻されたゴウカザルが驚いたような声をあげる。

「ボスゴドラ、そのまま諸刃の頭突き」

諸刃の頭突き。
危険を省みず思いきり頭をぶつける岩タイプ最強の技だ。
本来はその凄まじい威力の反動が使用したポケモンにも及ぶのだが、石頭の特性を持つボスゴドラは反動を無効化する為に反動ダメージを気にせずに繰り出していけるのだ。

「ヤバい！！ゴウカザル避けろ！！」

レイファが焦ったように叫ぶが遅い。弓なりに仰け反って力を溜めていたボスゴドラはその力を解放した。

「ふん、先ずは1匹か……」

リンドウさんの良く通る声が、風に乗って聞こえてきた。

## １２話：ボスゴドラ（後書き）

初めてのダブルバトルです。
アインが２匹だして戦った事はありましたがね。
戦闘描写を練習したいです。

## 13話：キレイハナ

「させるかよ、クチート驚かす攻撃！！」

ボスゴドラの介入を呼んでクチートをボスゴドラの足元で待機させていた俺は出番を今か今かと待っていたクチートに指示を飛ばす。

「クッチ！！」

クチートはボスゴドラの顔の高さまで跳躍し、大顎を思い切り開く。大顎の中の舌がボスゴドラをベロリと舐め上げた。

いきなり顔を舐められたボスゴドラは驚き、そのまま仰向けに倒れ込んだ。

「クチチチチ」

その間にゴウカザルは安全圏へと逃げ、自分の働きに満足したクチートは可愛らしい笑い声をあげる。

「ありがとう、アインさん。ゴウカザル今のうちにキレイハナにフレアドライブ」

「ガァァァァ！！」

「キレイハナ、剣の舞ですわ」

「ハナハナ～♪」

ゴウカザルがボスゴドラが倒れた隙に、キレイハナに向かい業火を纏って突進する。

炎、格闘タイプの中で最速をほこるゴウカザルの突進を避けるのは至難の技のはずだ。

しかし、エリカさんが出した指示は剣の舞だった。

剣を思わせる鋭く美しい舞いを踊ることにより、自らの士気を高め攻撃を急激に上げる技であり、防御技ではない。

ボスゴドラはまだ立ち上がっていない為、ボスゴドラの守りも狙えない。

攻撃を耐えて反撃する気か？

「クチート、キレイハナの視角から炎のパンチ」

それならば、少しでもダメージを上乗せしてやる。

指示をクチートに出すと、クチートの小さな拳に熱き炎が宿る。

そのままキレイハナの背後に回り込むと、拳を振り上げた。

ふとエリカさんの笑みに気づいて、フィールドを見る。

日本晴れの中キレイハナに、日本晴れの効果で威力の上がった技を繰り出そうとしている2匹のポケモン。

キレイハナは相変わらず舞っているままだ。

そしてやっと立ち上がったボスゴドラが……いない！！

日本晴れ……キレイハナ……剣の舞……大げさに倒れたボスゴドラ……消えたボスゴドラ。

そこでやっと繋がった。

「！！クチート、ゴウカザル戻れぇ！！」

「アインさん？」

俺の叫びにクチートは技を中断し下がり始める。
しかし、トレーナーではない者に指示を受けたゴウカザルの反応が遅れた。

リンドウさん達の口元が笑みを浮かべる。

「……遅い（ですわ）」

「……穴を掘るから諸刃の頭突きに繋げろ、ボスゴドラ」

「キレイハナ、クチートの背後に回ってリーフブレード」

ゴウカザルの真下の地面を突き破り現れ、ゴウカザルを打ち上げたボスゴドラ。
そのままゴウカザルが落ちてきた所に諸刃の頭突きを浴びせる。

「ゴゥラァアアー！！」

「ゴゥカァアァ！！」

「ゴウカザルッ！！」

日本晴れの中、特性の葉緑素の効果で身体の動きが活性化したキレイハナがゴウカザルを上回るスピードでクチートの背後を取り、剣の舞で底上げした攻撃力でリーフブレードでクチートを切り裂く。

「ハーナッ！！」

「クチーィ！！」

「クチート」

キレイハナとボスゴドラの足元に、音を立てて倒れ込んだゴウカザルとクチート。

ジムリーダーと元四天王……やるじゃん。

俺は自然と笑みを浮かべていた。

## １３話：キレイハナ（後書き）

寒いですね。
はい、風邪をひきました！！明日祝日なのにｏｒｚ

思った以上の応募の無さに泣きそうな作者でした（笑）

## １４話：ゴウカザル

「今だレイファ！！クチート、ボスゴドラに気合い玉だ！！」

「おぅ、ゴウカザル、ボスゴドラにインファイト」

倒れ込んでいたゴウカザルとクチートが跳ね起き、油断していたボスゴドラに攻撃を浴びせる。

「ゴゥカッカッカッカッカー！！」

ゴウカザルの頭の炎が一層燃え上がり、己の武器である四肢をボスゴドラに容赦なく打ち込む。

蹴り、殴り、突き、打ち、砕き、壊す。

「クーッチ！！」

ゴウカザルのラッシュが終わるとゴウカザルは横に飛び退く、そこに手元にエネルギーを球体に変換し終えたクチートがボスゴドラに気合い玉を放った。

インファイトを喰いフラフラだったボスゴドラに吸い込まれるようにヒットした気合い玉はボスゴドラを吹き飛ばした。

「ドゥラァァ……」

「ボスゴドラ戦闘不能！！」

大和撫子の凛とした声がフィールドに響いた。

「何ですって」

エリカさんが驚きの声をあげる。そりゃそうだタイプで攻撃を半減したクチートはともかく、ゴウカザルはタイプ一致の最強技を喰らったんだ普通は瀕死だ。

瀕死の筈のポケモンにやられたんだ、驚くのも無理はない。

しかし、ゴウカザルはある持ち物を持っていた。

「……気合いの襷か」

リンドウさんがポツリと呟く。

そう、体力が満タンの時に一度だけどんな攻撃も耐える事ができるアイテムだ。

昨夜の作戦で決めた事が上手くいったみたいだ。

「エリカ！！呆けるな。来るぞ」

呆気にとられているエリカさんにリンドウさんが叫ぶがもうクチート達は行動を始めていた。

「クチート、草結び」

「クチッ」

クチートが両手を上げると、キレイハナの足元に草が巻きつきキレイハナをこかす。

草結びは、重いポケモンなら重いポケモンほどあたえるダメージが

増える草タイプの技だ。
体重が軽く、技のタイプも半減するキレイハナに向いた技ではない。
だが、これでいい。
今のクチートの役目は活性した葉緑素の働きでゴウカザル以上の速さとなったキレイハナの動きを封じる事。

「ゴーカァァァ！！」
レイファの指示が来る前に、自分に来る指示が解っているのかゴウカザルは炎を纏い始める。
特性の猛火と、日本晴れの日差しがゴウカザルの纏う炎をさらに巨大にしていく。

決まったな……。

「ゴウカザル！！フレアドライブだ！！」

「ガァァァア！！」

レイファの指示を聞いたゴウカザル――否、炎の塊は、キレイハナに突進した。

「ハナーッ！！」

「キレイハナ戦闘不能！！」

キレイハナが燃えながら、吹き飛び大和撫子が戦闘不能を伝える。
「ごめんな、無理させて。ゆっくり休んでな」

「ゴゥ……カ」

フラフラと自分の元に戻ってきたゴウカザルにレイファは優しく声をかける。

そう、ゴウカザルも此処でリタイアだ。
気合いの襷の効果で気合いだけで立っていたが、フレアドライブの反動でその気合いも尽きてしまったのだ。

反動がない火炎車でも良かったのかも知れないが、フレアドライブに比べると威力の劣る火炎車ではキレイハナが攻撃を耐える可能性がある。
自らのポケモンを犠牲に確実に倒す、口で言うのは簡単だが、そう簡単にできる事じゃない。案外レイファは才能あるんじゃないか？

「ゴウカザル戦闘不能！！」

倒れ込んだゴウカザルを抱き止めたレイファがモンスターボールにゴウカザルを戻すと、リンドウさんとエリカさんも戦闘不能になったポケモンを戻した。

俺は足元に来ていたクチートに気づくと、しゃがみこんで話しかける。

「まだイケるか？」
「クチ」

コクリと頷くクチート、可愛いなチクショウ。クチートの頭を撫でてやると嬉しそうにじゃれてきた。
いつもならもっと遊んでやるが、今はバトル中だ。

俺が立ち上がるとクチートもバトルの顔に戻っていた。

さぁ、試合再開だ。

## １４話：ゴウカザル（後書き）

やはり応募は早すぎましたかね、のんびり待ちますか……ご意見ご感想切実にお待ちしております。

## 15話：ドダイトス

「行け、ルカリオ」

「ルカァアア」

レイファが続いて出したのはルカリオ、二足で立つ青い犬の様なポケモンだ。
放つ静かな雰囲気とアイマスクの様な目元を覆う黒い模様が、どこか近寄りがたい空気を感じさせる。

「荒れ狂いなさい、ドダイトス」

「ドダーイ！！」

エリカさんが続いて出したのは大陸ポケモンのドダイトス。
巨大な陸ガメの様な姿をしたポケモンで大陸の名の通り背中には木々が生い茂り、川が流れるまるで大陸のような空間が広がる。
後ろ足で立ち上がり、咆哮をあげるドダイトス。なんだか雄々しいな。
レイファ情報によるとエリカさんは可愛いポケモンや、綺麗なポケモンが好きらしいのだが……。
カッコいい……もしくはゴツい部類に入るドダイトスはエリカさんらしくない選択じゃないか？

「相変わらず可愛いですわね、ドダイトス」

「ドダーイ♪」

訂正、エリカさんはただ者ではない事を忘れていた。
うん……感性もただ者ではないな。

次はリンドウさんがポケモンを出す番か、と視線をリンドウさんへ向けるがリンドウさんは静かに此方を見つめているだけだ。

「ゴウカザルに気合いの襷を持たせるというのは君のアイディアかね？」

おっと、質問タイムらしい。俺は沈黙を持って答えとする。

「フハハハハッ、面白い。この胸に込み上げてくる熱い気持ち……昔を思い出す。よかろう、アイン君、レイファ私も本気を持って君らを倒そう」

悪の親玉みたいな笑い声を上げるリンドウさん。
あのボスゴドラが本気では無いと仰りますか、この方は。

しかも、リンドウさんの喋ってる途中から雲行きが怪しくなってきてるし。

雲ひとつ無かった空は黒雲に覆われ、稲光も見える。
エリカさーん、日本晴れお願いします。

「轟き穿て！！漆黒の稲妻よ！！」

リンドウの叫びに反応するかのようにソイツは現れた。

## １５話：ドダイトス（後書き）

リンドウの切り札とは一体？

て言っても勘の良い方は分かりますよねｗｗ

## 16話：ゼクロム・前編

ソイツはモンスターボールからではなく、雷雲の中から現れた。
雷を光らせ、リンドウさんの声に応じる。

黒雲と同じ色の体色。
空を蹴る力強い脚。
タービンの様な不思議な形をした尻尾。
鳥でも竜の物でもない唯一無二の形をした翼
翼と同様の形をした強靭そうな腕。
鋭利な歯が立ち並んだ顎。
見つめられればそのプレッシャーに卒倒しそうな赤黒い瞳。

リンドウさん以外のその場にいた誰もがそのポケモンの神々しさに息をするのを忘れた。

目の前の存在はポケモンの――否、生物のカテゴリに当てはめるには強く美しすぎた。

ソイツの名はポケモンに関わる人なら誰でも知っているだろう。
学者だって、ロケット団だって、学生どころか幼稚園児ですら知っているはずだ。

だってソイツは“伝説”として語り継がれている存在なのだから……。

「……ゼクロム」

「■■■■■――――！！！！」

俺の呟きに答えるかの如く、ゼクロムは吼えた。

私は此処にいるとでも叫んでいるかのように……。

## １６話：ゼクロム・前編（後書き）

うん、短いねぇ。

まぁ、一区切りついたのがこれだったんで目をつぶってください。

企画、ご意見ご感想切実に募集中。

## 17話：ゼクロム・中編

「先に謝っておこう、エリカ……レイファ。お前たちは此処で試合終了となるだろう」

「兄様？……それはいったいどういった意――」

リンドウさんの発言に対し、エリカさんが首をかしげ尋ね終える前に奴が動いた。

「■■■■――――！！」

それは技でも何でもない行動。

浮遊していたゼクロムが地面に脚をつけ、吼えただけで蒼雷が他のポケモン達を貫く。

「――――！！」

天災が身体に突き刺さり、声にならない悲鳴を上げるルカリオ。

それを呆然と見ていたレイファだったが直ぐにルカリオをボールに戻す。

「チ……ィ」

先の戦闘の疲労もあってか、蒼電が身体を包み込んだ瞬間意識を失ったクチート。

俺は無言でクチートをボールに戻した。

ゼクロムはただ吼えただけ。
だがそれだけで、ルカリオとクチートは一瞬にして戦闘不能に陥った。

そして、その被害はエリカさんのドダイトスにも及んでいた。

「ドダ……ガガガガガ」

普通なら無効化するはずの雷電を浴び、地の底から響いてくるような声をあげ、身体を無茶苦茶に掻き回す電流を耐えるドダイトス。

「ドダイトス！！兄様雷を止めてください！！」

「無駄だ、この雷はゼクロムの意思ではない。エリカ、お前の大切なポケモンを傷つけた身でほざくが私に任せてはくれないか？」

「……分かりましたわ、レイファ……フィールドから出なさい」

「わ、分かった。……アインさん……ごめんな」

リンドウさんは静かにエリカさんに告げる、エリカさんはドダイトスの苦しむ姿も見たくない事もありリンドウさんの言葉に従った。

これで2匹目のポケモンを失ったレイファとエリカさんはリタイアとなる。エリカさんは勝負の邪魔になると判断したのか、レイファを諭してフィールドから離れていった。
レイファもゼクロムの威圧に呑み込まれながらも、俺に頭を下げるとエリカさんに続いた。

「クチート、ルカリオ、ドダイトス戦闘不能！！」

ドダイトスがボールに戻されると、大和撫子は雷の中でも良く通る声で宣言する。

スゴいな……大和撫子、まだ審判続けれるのか。俺だったら直ぐに逃げ出してる。てか、今も逃げ出したい。

俺にはまだポケモンがいるが、果たして目の前の存在に勝てるのか？

電気を無効化する能力を持つドダイトスさえもが、ゼクロムの呼び起こした蒼電に身を貫かれ倒れたのだ。

……普通じゃない。

仮にも伝説と呼ばれている存在だ、普通じゃないのは分かってる。

分かってるんだが、頭が理解しようとしないのだ。

だって……こんなのただの化物じゃないか……。

「どうした？アイン君……ゼクロムも君の最後のポケモンと戦うのを待ちわびているぞ？」

リンドウさんが何か言っているがよく聞こえない。

俺は震えながら、目の前の圧倒的存在に目を奪われていたのだから。

そうだ……敗けを認めれば良い。

レイファの講師という安定収入は失われるが、この恐怖から抜け出せるなら何でもいい。

簡単じゃないか、手を挙げて敗けを認めれば良い。

ただそれだけ、それだけでこの重圧から抜け出せる……。

だって、無理じゃないか。こんな化物に勝てっこない。仕方ないんだ。

俺はゆっくりと手を上げていった。

## １７話：ゼクロム・中編（後書き）

しばらく新たにポケモンが出てきそうに急遽三部構成に。

企画、ご意見ご感想切実に募集中です。

## 18話：ゼクロム・後編

――カタカタ。

敗けを認めようとする俺を引き留める者がいた。

俺は腰に感じた振動に伸ばしかけていた手を戻し、その手で揺れているボールを取る。

ボール越しに見えるのは俺の切札（ジョーカー）。

俺の手持ちの中で最強のポケモン……目にはギラギラと闘志の炎が燃えている。

まさか……闘うつもりなのか？この化物と？

いつもは俺の命令を聞かずに、好き勝手暴れる事しか脳のないこの暴れん坊が、しっかりと俺の瞳を見つめゆっくり頷く。

勝負を捨て逃げようとした俺を信じてくれるのか？

「アインさーん！！頑張れー！！」

俺は声の方を振り替えれば、審判席から身を乗りだし叫ぶレイファの姿を見つけた。

俺もまだまだだな……一時的な恐怖に呑まれるなんて。

今一度、ボールの中のポケモンに視線をやると力強く頷いた。

「降参か？アイン君」

先ほどはよく聞こえなかったリンドウさんの声もよく聞こえるようになる。

「まさか……ちょっと驚いてただけですよ。伝説を目の前にしてね」

もう震えも止まった。

ゼクロムを直視しても、恐怖を感じる事もない。……いや、嘘言った。

やっぱり恐いものは恐い。

だが、反面嬉しく思う。

伝説と戦えるなんて滅多に無いからな……じゃあ、そろそろ行こう勝利を目指して。

俺はジョーカーをフィールドへと君臨させた……。

## １８話：ゼクロム・後編（後書き）

感想を頂けてテンションが上がりっぱなしのＡｒｔｓです。
モチベーションも上がりますね。

アインの切り札……ちょっとひっぱりすぎかな？（；「｜「）

## 19話：ゼクロム・リンドウ視点

正直驚いた。
目の前の青年にこれほどまでにワクワクさせられるとは……。
レイファは兄の私が言うのも何だが、ポケモンバトルの才能がある。
エリカや私以上の戦闘センスに時たま驚かされる時もある。
しかし、優秀故の弱点があった。
レイファは教科書通りの戦い方しかできないのだ。
もっとも効率の良い動作を常人離れした思考スピードで即座に考えあげて、実行に移す。
そういえば聞こえは良いだろうが。実際は違う、初心者ならそれで倒せるだろうが中堅者あたりになるとその弱点を補う様な行動をしてくる。
レイファは考え抜いた行動を回避されると、即調子を落としてしまう。
読みが甘いのだ。あの子は。ポケモンバトルはそんな簡単なものではない。
だが……青年はそんなレイファの特徴を良く理解し、良く活かした。
本当ならこのバトル、ボスゴドラだけで決めるつもりだった。

しかし、レイファの強さを最大限に引き出した青年にボスゴドラは敗北した。

私は久しぶりに胸に込み上げてくる気持ちについやり過ぎてしまった。

自分の全盛期の“強さ”を呼び起こしてしまったのだ。

――ゼクロム。

私が昔、旅の中で出会った伝説の存在。

私のその頃を知る数少ない存在。

共に“彼”の野望を止めた仲間。

この家を父から受け継ぐことになってからは私の元を離れていった生きる伝説は、久しぶりの私の呼びかけにも迷うことなく答えてくれた。

しかし、ゼクロムを呼び出しておいて何だが即座にやり過ぎだと思い直した。

普通のトレーナーがゼクロムを恐れない筈がないのだ。

伝説とただのポケモンでは象と蟻くらいの戦力差がある。

「どうした？アイン君……ゼクロムも君の最後のポケモンと戦うのを待ちわびているぞ？」

アイン君が次のポケモンを出す事は無いだろう。

彼がゼクロムという存在に呑まれている事は直ぐに分かった。
だから私は助け船を出してやる。
「降参か？アイン君」
この言葉にアイン君は乗るだろう。
彼は多少腕は立つ様だが、流石に伝説に挑む勇気は持ち合わせていないだろう。
彼には悪い事をした。
つい昔を思い出して、私の本気を呼び出してしまったのだから。
もしゼクロムではなく、違うポケモンを出していればお互いが納得できるバトルが出来たかもしれない。
私をここまで熱くさせてくれた彼に敬意を評して例外を認めてやろう。彼の元ならレイファもきっと強く――
「まさか……ちょっと驚いてただけですよ。伝説を目の前にしてね」
――驚いた。
彼の目からはまだ戦意が喪失していない。
彼が選んだのはゼクロムから“逃げる”のではなく、“挑む”道。
そして彼が繰り出した彼の最後のポケモン。
感じる……その強さを。
そして同時に胸の鼓動が早まる。この高揚感には覚えがある。

これはまるで“彼”との最終決戦。
隠と陽、“黒”と“白”どちらの強さが上なのか、本物なのか求めあったあの戦い。
私にとって忘れられないあの戦いを、彼と彼の切り札は再び魅せてくれた。

「■■■■■――――！！」

ゼクロムも目の前の巨体な存在に咆哮をあげる。

「グルゥァァァァ！！」

それに応えるかの如く巨体も吠える。

身体中から存在を誇張するかの様に突き出た幾つもの剛針。
通常個体の毒々しい紫の体色とは異なり、ワインレッドの体色。

そして、伝説を目にしても怯むことの無い、まるで王の様に堂々とした態度。

「針の王……それが君の切り札か」

「えぇ、伝説を討つ俺のラストカードです」

「グルゥァァァァ！！」

針の王――ニドキングは主の言葉に反応して吼えた。

## １９話：ゼクロム・リンドウ視点（後書き）

少しだけリンドウの過去を明かしました。
代々の読者様は気づかれたかと……。

ようやくアインの切り札が出せました。
コイツも色々と規格外ですので、ずっとゼクロムのターンといった事にはならないと思います。

## 20話：ニドキング

俺の切り札であるニドキング。

普通のニドキングとは2つ異なっている点がある。

先ずは身体の色。

普通ニドキングは毒タイプらしい明るい紫色をしている。

しかし、俺のニドキングはくすんだ紅、所謂ワインレッドの体色をしている。

そして、もう1つ。

俺のニドキングの体躯は、縦にも横にも普通のニドキングの2倍近くはある。

だが巨体に反して通常のニドキングのスピードを遥かに上回っているのだから恐ろしい。

3m近いゼクロムと並んでも全く比毛をとらない巨体を揺らしニドキングは吼える。

目の前の相手に闘争心を掻き立てられているらしい。

「では、存分に闘りあおう」

「胸借りますよ、リンドウさん」

「■■■■――――！！」

「グルゥァァァァ！！」

ニドキングとゼクロム、巨大なポケモンどうしが真っ正面からぶつかり合う。

「暴れろ、ニドキング！！」

「グガラァァ！！」

俺が出した指示は“暴れる”という攻撃技ではなく、ニドキングに攻撃を任せるという意味の言葉。

正直に言おう。

俺はこのニドキングを使いこなせていない。

見た目からも分かるようにこのニドキングは普通ではない。

全てが“異常”。

破壊力も耐久力も俊敏性だって異常の一言につきる。

俺の命令も簡単な物にしか従わない。逆に、ニドキングを束縛する事にもなるしな。

だから、この“暴れろ”という指示は的確なのだ。

「グガラァァ！！」

ニドキングの唸り声とともにゼクロムの巨体が浮き上がる。

自重を簡単に持ち上げられた事に驚くゼクロム。そりゃそうだ、あの巨体じゃ持ち上げる事なんてほとんどないだろうしな。

ニドキングはゼクロムを地面に叩きつけると、起き上がれないようにゼクロムの胸元を踏みつける。

「■■■■――――！！」

ニドキングの口に光が溜まっていくのを確認したゼクロムは、無茶苦茶に暴れまわるがニドキングはその都度足に力を入れていく。

「ゼクロム、竜の息吹だ」

ニドキングが何をしてくるか感づいたリンドウさんがゼクロムに指示を飛ばすが遅い。

ニドキングの口に溜まった破壊の粒子は光線となってゼクロムに放たれた。

少し遅れてゼクロムの口からも竜の力が宿った息吹が放たれ、ニドキングの破壊光線とぶつかる。

しかし、元の技の威力差と胸を踏みつけられ本来の力が出せない事から徐々に破壊光線が竜の息吹を呑み込んでいく。

「グルゥァァァァ！！」

「■■■■――――！！」

ニドキングが口を更に開けて破壊光線の勢いを増加させると、竜の息吹は簡単に押し負け力の奔流がゼクロムの顔面を襲う。

「ゼクロム、放電」

リンドウさんの声にゼクロムが黄色く輝く。

「グルゥァア！！」

毒タイプと地面タイプを併せ持つニドキングにとって、本来なら食らうはずのない電気タイプの技。しかし、ニドキングは技を中断し、悲鳴を上げながら後退する。

まただ、ゼクロムはさっきも電気を無効化するはずの地面タイプのドダイトスを蒼雷で貫いた。

伝説の放つ技がそれほど強いという事なのか？

いや、違う。いかに伝説のポケモンといえどタイプを無視はできない筈だ。となれば答えは１つ。

――特性だ。

特性とはポケモンが持つ特殊な能力の事。

ポケモンによって持つ特性の個数は違うが、どんなポケモンも必ず１つ有しているのだ。

俺のポケモンで例を上げるなら、サーナイトの他者と感覚を共有する“トレース”などだ。

だが、タイプを無視する特性など聞いたことがない。

「気づいたかね？」

リンドウさんが思考する俺に気づいたのか静かに声をかけてくる。

「ゼクロムの特性は“テラボルテージ”。相手のタイプ、特性、状態異常全てを無力化する唯一無二の能力だ。」

正直、驚きを通り越して呆れてる。
俺のニドキングも相当な“異常”だが、やはり伝説の“異能”には敵わないみたいだ。

全てを無視するゼクロムだけの特性。
まったく、そんな反則じみた能力見せられちゃ――

「グルゥァァァァ！！」

――ニドキングが喜んじまうじゃないか。

ニドキングは吼えるとゼクロムに突進していく。

破壊光線は強力な技だが反動が存在する。
普通ならしばらくは動けないはずなのだがニドキングは力ずくで反動を抑え込んだ。

俺のニドキングの特性は“力ずく”、技の効果を無視して攻撃を猛攻へと変える能力。

多分、反動を無視するのは俺のニドキングだけだが。

「迎え撃て、ゼクロム」

ゼクロムは両手を広げて、ニドキングを受け止める。
そのまま電流を帯びた口でニドキングに食らいついた。

ゼクロムの雷の牙だ。

「グガラァァ！！」

本来なら無力化するタイプの技に抵抗力がある筈もなく、牙を通して体内を蹂躙する電流にニドキングは苦悶する。

だが、ニドキングは止まらない。

尻尾で自分の足元を思いきり叩きつけると、地面が揺れ始める。

ニドキングの地震攻撃にバトルフィールド全体が揺さぶられ、立っているのが難しくなってきた。

ニドキング……俺らがいる事忘れてやがんな？完全にトリップしてやがる。

リンドウさんは揺れに動じる事なく立っている。流石大人の余裕って奴か？

地震の揺れを間近で感じたゼクロムは僅かに牙を離す、牙が弛んだその隙をニドキングは見逃さずゼクロムの顔を掴むと地面に叩きつけた。

流れは完全にニドキングに向いているそう思えた。

## ２０話：ニドキング（後書き）

ニドキングに嫁補正がかかりすぎてますね……。

伝説を圧倒するとは、しかし世の中そう甘くは無いのだよニドキング！！

企画、ご意見、ご感想お待ちしております。

## 21話：ニドキング・後編

「君には驚かされてばかりだ。」

ニドキングが倒れたゼクロムに尻尾を叩きつけているというのにリンドウさんは冷静に口を開いた。

「まさか、ゼクロムをも圧倒する破壊力のニドキングが隠し玉だったとはね。だが、そろそろケリをつけようと思う」

リンドウさんの言葉にゼクロムが蒼く輝き始め、ニドキングの猛攻をものともせずに立ち上がる。

「グガラァア！！」

ニドキングは尚も攻撃を続けるが、まるでニドキングの攻撃など効いていないかの様にゼクロムは宙へと浮かび上がった。

ゼクロムの角先が、ゼクロムの尻尾がより一層濃い蒼に輝くと、ゼクロムの両腕がバチバチと帯電していく。

ヤバい……本能的に分かる、あれを喰らえば終りだ。

「ニドキング、破壊光線だ、最大出力で！！」

「ニドッ」

ニドキングも次にくる技が尋常ではない事を感じたのか素直に俺の

いう事を効き口に破壊の粒子を溜めていく。

にしても久しぶりに狂ったような咆哮ではないニドキングの声を聞いた気がする。……って、こんな事考えている場合じゃない。

「ゼクロム、クロスサンダー……」

「■■■■――――！！」

「グガラァア！！」

ゼクロムが交差した両手を振り、Ｘの形をした雷電が放たれるのと、ニドキングが通常の３倍の太さの破壊光線を放つのは同時だった。

結果は直ぐに分かった。クロスサンダーは力の奔流を逆に呑み込むと更に大きさを増してニドキングに直撃した。

「ガ……！！」

直撃の余波がフィールドを荒れ狂う。

「くっ……。」

衝撃波に耐えきれず俺は吹き飛び、何かに後頭部を強打してしまった。

薄れゆく意識の中で見たのは、悠然と佇むゼクロムとゆっくり倒れていくニドキングの姿だった。

## 21話：ニドキング・後編（後書き）

まぁ、負けますよね。
指示があればもう少し善戦したでしょうが、まぁニドキングを使いこなす事がアインの当面の課題です。

## 22話：結末

――逃げるのか？

声が響く。

俺は漆黒の空間に浮かんでいた。

――逃げれるとおもっているのか？

暗闇の中また声が響いた。

もう何度も経験してるせいか直ぐに理解する、これは夢だ。

――正義の味方にでもなったつもりか？

男とも女ともつかない声……ではなくこの声は“俺の声”だ。

頭に直接響いてくるかの様に聞こえる“俺の声は”少々……てかかなり五月蝿い。

――偽善者め。

これの対処法は1つ。

ガン無視だ。

――お前は全てを救える気でいたのだろう？

あー、そうか俺はゼクロムのクロスサンダーの衝撃で……。
負けたのか、俺は。
レイファには悪い事しちまったな。

――結果はどうだ？

にしても、まさか伝説のポケモンを使ってくるとはな。
リンドウさんって一体何者なんだ？

――結局、お前は理想に溺れた悪人なのだ。

「黙れっ！！」

俺は我慢の限界を感じて跳ね起きた。

近くにいた人影が驚いたのか肩をビクつかせた。

「わりぃ、驚かせちまって」

額を押さえながら、近くの人影へと謝罪する。多分、レイファだろう、気を失った俺を心配して懐抱してくれていたって所か……。

「気にするな。悪夢でも見たか？うなされていたぞ？」

あれ？レイファってこんな野太い声でしたっけ？

だいたい予想はついているがゆっくりと顔をそちらに向ければ……
思った通りのリンドウさん。

普通さ、こんな展開だとレイファかエリカさんがいて優しい声をかけてくれるんじゃねぇの？

「あっ、すみません迷惑かけて」

どちらにせよ、懐抱してくれたのだから礼を言っておく。

「……君はポケモンを本当に大事にしているのだな」

「え？」

「君が倒れた直後、君のポケモン達がモンスターボールから君を守るようにして現れたよ。瀕死状態だったはずのクチートも、ゼクロムのクロスサンダーを喰らったニドキングさえも再び立ち上がり私の前に立ち塞がった……もう戦う力は無かったようだがね。よほどの信頼関係が無ければあんな行動はとれないだろう」

俺は何故か枕元に並べてあった6つのモンスターボールの中の相棒達を見つめる。

「勝手ながら並べさせて貰った。彼等も君の側に居たいだろうと思ってね」

俺が起きたのに気づいたのか、ボールをカタカタならしたり、ボールの中で安心したような表情を浮かべる相棒達。

「さてアイン君。本題に入ろうレイファの事だ」

そう言えばそうだった。リンドウさんが勝ったのだから俺はレイファを教える事が出来ない。

明日から仕事が見つかるまでは節約生活か……。

「レイファが依頼した件は約束通り諦めて貰おう」

「はい、分かりま」

「話は最後まで聞きたまえ」

頷こうとする俺をリンドウさんは引き留めた。

「私をあそこまで熱くさせたのは君で二人目だ。そして、その実力を買って君に依頼したい。どうかレイファの……妹にポケモンバトルというものを教えてやってほしい」

「へ？」

「君の仕事の都合もあるだろうから気が向いた時でいい、報酬はその都度渡そう……確かレイファはこう言ったそうだね」

慣れていないのか強張った笑みを浮かべるリンドウさん。

……えと……つまり？安定収が確定？

「返事を聞かせてくれるかな？」

「はい！頑張ります」

よっしゃぁあぁぁ！！

これで仕事が無い時期に木の実で飢えを凌ぐ生活とはオサラバだ！！

飛び上がって喜びたい……キャラじゃないからしないけどな

「そうか、ではよろしく頼むよ。」

「はい！」

「ゼクロムも君を気に入ったらしいからまた相手をしてやってくれ」

「……それはちょっと身が持ちません」

「「アハハハハハ」」

こうして俺は安定収入を獲得できるようになったのだった。

## 22話：結末（後書き）

あぁー！！

遂にごまかしようがなくなったぁ、遂にタイトルからポケモンの名が消えました……。

とりあえず一章完です。プロフィールを挟んで応募ただいた依頼をこなしていきます。

## プロフィール

名前：アイン
性別：男
年齢：２２
容姿：老け顔。服装は茶色のロングコートが多い。ボサボサの黒髪。顔つきは中の上といった所。
性格：無口で冷めたような性格だが、心の中や親しい間柄では饒舌だったりする。金になる話には直ぐに飛びつく。
職業：便利屋
備考：老け顔を自覚しており、冷めたような性格から自らをおじさんと名乗ることもある。可愛い物好きであり手持ちにも可愛らしいポケモンが多い。ポケモンが好きで特に手持ちのポケモンを溺愛していたりする。手持ちのポケモンにはニックネームがあるらしいが、キャラじゃないとほとんど使わない。一応主人公。
所持ポケモン：
サーナイト（♀）

アインの主力であり、家事能力を持たないアインの代わりに家事全般を任されている。
気配りも上手く、アインからは良いお嫁さんになるとまで言われている。
過去に何かあったらしく、鳴き声を発する事が出来ない。
特性のトレースを利用し、アインと擬似的に一体化して戦う。

クチート（♀）
サーナイトと双璧をなすアインの主力。
悪戯好きで甘えん坊でアインに構って貰うのが好き。
普通より身体が小さく、半分程度の大きさしかない。

身体能力が高くその実力は指示なしでフーディンを沈めるほど。
多彩な技を使って質と量で相手を押しきる。
アバゴーラ（♂）
無口だがかなりの実力を持つアインの手持ち。
困っている人を見ると、黙って助けてしまう男前。
水上移動の際にも呼び出されたりする。
身に待とう岩の鎧を変化させて戦う。

ニドキング（色ちがい）
ワインレッドの体色と通常の個体の2倍近い巨体のアインのエース。
全ての能力が規格外だが、アインは強力過ぎる能力故に使いこなせていない。
だが信頼関係は築けている。
規格外の能力の中で特に優れている膂力を惜しげもなく使用して戦う。

名前：レイファ
性別：女
年齢：１５
容姿：大きなつり目がチャームポイント。茶色のロングヘアー。比較的ラフな格好を好むが、家柄か着物も着こなす。
性格：強気で大雑把な性格。正義感が強く曲がった事が大嫌い。しかし内面は年相応の少女の為に精神的に打たれ弱い。
職業：トレーナー
備考：ポケモンバトルに関して天才とも言えセンスを持つが、勤勉な性格が災いし“最良”の行動しか出来ず、読まれやすい。その為に戦歴は良くない。手持ちは格闘タイプが多い。……ヒロインではない（笑）
所持ポケモン：

ルカリオ（♂）
レイファの主力。
小説内ではやられ役や引き立て役が多いが決して弱いわけではない。
ゴウカザル（♀）
レイファのエース。
どんな事があってもレイファの命令を絶対とする。好戦的な性格で
レイファと気が合う。

名前：リンドウ
性別：男
年齢：３０
容姿：線が細い顔つきだがレントラーの様に鋭い眼つきが厳格さを
印象づける。髪はうなじあたりで結い上げた黒髪。
性格：規律を重んじる性格。一見冷静だが熱い面も持ち合わせてい
る。
職業：不明
備考：レイファとエリカの兄であり一家の大黒柱。ポケモンバトル
で有名な自らの家を誇りに思っている。何より家族を大事にしてい
る。何か職業についているらしいが不明。過去にも不明な点が多く、
伝説のポケモンのゼクロムを使用する等謎が多い人物。
所持ポケモン：

ボスゴドラ（♂）
アインとレイファとのバトルで一番手として登場。体躯を存分に活
かしたパワフルなバトルスタイルでゴウカザルを追い詰めるが、気
合い襷で耐えたゴウカザルとクチートの連続攻撃に倒れた。

ゼクロム
リンドウが呼び出した伝説のポケモンでリンドウの切り札。伝説の
名に恥じずクチートとルカリオ、攻撃を無効化する筈のドダイドス

を一瞬にして倒した。アインのニドキングの猛攻にもビクともせずに、ニドキングをクロスサンダーの一撃で倒した。リンドウの過去を知る数少ない存在。
マンムー
名前だけ登場

ドラピオン
同上。

ミロカロス
同上。

名前：エリカ
性別：女
年齢：２５
容姿：原作通り。
性格：飄々とした掴み所が無い性格。のんびりしているようで実は計算高い。バトル好き
職業：ジムリーダー
備考：タマムシシティのジムリーダーを勤めるレイファの姉。草タイプをメインに使用する。
所持ポケモン：
キレイハナ（♀）
リンドウのボスゴドラのタッグでクチート達を追い詰めるが、隙をつかれて倒れる。葉緑素の特性を活かして剣の舞を回避に利用したりと予想外の行動を行いレイファを焦らせた。

ドダイドス（♀）
キレイハナに続いてエリカが繰り出したポケモン。
エリカ曰く可愛い子。ゼクロムの攻撃に巻き込まれ見せ場のないま

ま倒れた。

## プロフィール（後書き）

第一章時点でのプロフィールです。

こう見るとキャラが少ないですね。

企画も集まって来ましたので、身勝手ですが募集は今週いっぱいにさせて頂きます。

## 23話：カビゴン

「ユキナリさん、此処が最後の1の島だ」

「おー、やはり賑わっとるのぉ」

俺はカントー地方にあるナナシマと呼ばれる文字通り7つの島に来ていた。
タマムシシティから離れたこんなとこに来てる理由はもちろん仕事だ。

仕事の依頼が入ってきたのは三日前に遡る。

俺はレイファの講師としてリンドウさんに認められた後、ポケモンの回復だけさせてもらうと自宅……ってか事務所に帰ってきていた。
もう辺りは暗くなってる。

「留守にしていたのは数日間とはいえ、やはり家は落ち着くな」

伝説と対峙した時に磨り減った精神力はやはり住み慣れた場所じゃないと回復しない。

「ふぅ……」

ロングコートを適当に脱ぎ捨てると俺はソファーへと寝転がる。

リンドウさんとこで、ちゃんと寝かせて貰ったんだがやっぱり家に

帰るとドッと疲れが出る。

「クッチ、クッチ」

そのまま寝てしまおうかと思っていた時にクチートの声が聞こえ顔をそちらに向ける。

いつの間にかボールから出ていたクチートは一生懸命ソファーによじ登ろうとしていたが、ツルツル滑るソファーに苦戦していた。

あぁ、可愛いっ。

やっぱりポケモンは俺にとって一番の癒しだ。

俺は起き上がって、クチートを抱き上げるとクチートは嬉しそうに笑った。

こりゃ、寝てる場合じゃないな。

俺の膝の上でご機嫌なクチートを撫でながら今日の飯は何だろうかと考えていると、同じようにボールから出ていたサーナイトが困ったような笑みを浮かべてやって来た。

「……どうした？サーナイト」

「……。」

サーナイトは苦笑を浮かべたまま、開けたままの冷蔵庫を指さす。

丁度、ソファーからは台所にある冷蔵庫の中身が見てとれた。

「あっ……」

見事に空っぽだった。

そういや、すっかり忘れてた食材を買う金も無くなってきたからレ

イファの家を訪ねたんだ。

レイファの講師としては認められたが、報酬は前金では無いため現在の手持ちは少ない。

「……えっと……お前らの飯くらいは買えるな」

今財布を確認したが、俺が我慢すればポケモン達の夕飯くらいは調達できそうだ。

身体のせいかカビゴンみたいに食うニドキングには少々我慢してもらうとしよう。

俺はリンドウさんとこにいる間にご馳走食わせてもらったし、我慢するとしよう。

「気にすんなよ、俺は1日や2日食わねぇでも大丈夫だから」

俺の言葉に心配な表情で俺の肩に手を置くサーナイト。

俺は笑ってサーナイトの頭を撫でてやる、クチートが焼きもち妬きそうだからクチートも同時に撫でてやる。

「じゃあ、行くか。お前らは来るか？」

とりあえずさっさと買いにいかないと店がしまっちまうから、立ち上がって2匹に尋ねる。

サーナイトは笑顔で頷きロングコートとを掲げた、俺はそれに腕を通すと足元で肩に乗せろとせがむクチートを抱き抱える。

とりあえず目指すはポケモンフーズ専門店だ。

## 23話：カビゴン（後書き）

タイトルの無理矢理感はスルー推奨で。

さて、いよいよ企画が始まりました。

期待にそえるような物を書けるように頑張ります。

## ２４話：ペンドラー

外に出ると徒歩でポケモンフーズ専門店まで向かう。
俺は車や自転車なんざ持ってないからな。

店までは結構距離が有るんだがサーナイトとクチートがいるからか退屈せずに店に辿り着けた。

丁度、店の前についた時だ。

「おーい、そこの君ー」

呼び止められた気がして振り返ると、アロハシャツ姿のじいさんが此方に向けて走ってきていた。

「何なんだ？じいさん」

目の前まで来たじいさんに声をかけるが、年がいもなく走ったからかじいさんは中々息が整わない。

「ゼェ……ゼェ……たす……ゼェゼェけ……。」

「いたぞ！！」

断片的に聞こえたじいさんの言葉と、此方に向けて走ってくる３人組の男に気づいて理解した。

どうやら、このじいさん追われてるらしい。

「あの素敵ファッションはロケット団か……」

しかも追いかけてる側がロケット団ときた、これは仕事の匂いがするな。

「サーナイト、クチート」

俺はじいさんを後ろに下がらせると2匹に準備をするよう指示する。

此方に走ってくるロケット団も俺と俺のポケモンに気づいたらしく、ギャロップとオオスバメとドードリオを繰り出した。

どいつも俊足で有名なポケモンだ。走りじゃ到底逃げ切れない。しかも、じいさんというハンデが此方にある。

逃げるにしては分が悪いと俺は判断すると、後ろで息を整えるじいさんの背中を擦って時を待った。

「あ、貴方は！！」

近くまで来たロケット団が俺の顔を見てハッとする。

誰だっけ？

リーダー格のおかっぱ頭に取り巻きみたいに控えるひょろ長と小太りの3人組……一度見たら忘れなそうな外見なんだが……。

「キーッ、またそのクチートですか！！貴方のクチートのせいで私のフーディンは外が怖くなってしまったのですよ？ポケモンの引きこもりなんて聞いたことがありません」

待てよ……金切り声……フーディン……あっ、思い出した。こいつレイファのルカリオを奪おうとしてた奴だ。

「誰かと思えばあの時のズッコケ3人組」

「「「誰がズッコケ3人組だ」」」

ハモってやがる……仲良いなこいつら。

「復讐してやりたいのは山々ですが、今は貴方に構ってる暇はありません。そこを退きなさい！！」

「退いたらこのじいさんを拐ってオサラバってわけか？」

「そうなんだな、痛い目みたくなかったら素直に退いた方が良いんだな」

「この前みたいに行くと思ったら大間違いだゾ？オイラ達には支給されたポケモンがいるんだゾ」

始めて取り巻きが喋ったな。ってか特徴ある口調だ。

「なぁ、じいさん。これ助けたら謝礼金とかくれる？」

俺は前のズッコケ3人組を無視して、後ろのじいさんに声をかける。じいさんは黙って何度も頷く。

交渉成立だな。

「こうなったら、お前達。支給ポケモンを出すのです！！」

「あくまで“支給”強調すんのな」

おかっぱの指示でズッコケ3人組は黒いボールからポケモンを繰り出す。

「バァアアンッ！！」

「ドォォオン！！」

「ゴラァァァア！！」

繰り出されたのはバンギラス、ドサイドン、ボスゴドラ。

重量級かつ、かなりの実力を持つポケモンだ。

このロケット団からの支給ポケモン3体に加えて、ズッコケ3人組のポケモンであるギャロップ、オオスバメ、ドードリオが相手となると少々キツいな。

ニドキングを出せば、簡単にケリはつくだろうけど……市街地じゃ周りに被害が及びかねない。

なら戦法は1つ。

「……サーナイト、クチート気合い玉だ」

「……」

「クチッ」

「バンギラス、ドサイドン、ボスゴドラ。“守る”です」

サーナイトとクチートは頷くと両手に球体を作り出す。
ロケット団達は攻撃が来ると分かると、重量級3体を前に出し、攻撃から身を守る壁にする。

3体が守りの体制に入るが、作戦通り。

サーナイトとクチートは3体が守りの体制に入るのを待っていたかのように気合い玉を放った。

……地面に向けて。

舗装されたコンクリートが砕かれ、ズッコケ3人組の前に砂煙が起こる。

今だっ！！

「行け、ペンドラー」
「ドラァアア！！」

俺がボールから出したのは2mを超える巨大なムカデの姿をしたポケモン。

俺はじいさんをペンドラーの背に乗せると、クチートを抱えてペンドラーの背に飛び乗る。
サーナイトももう一度気合い玉で砂煙を起こすと素早くペンドラーの背に飛び乗った。

「じいさん、しっかり捕まってろよ。ペンドラー駆け抜けろ！！」

「ドラッ！！」

俺の指示でペンドラーは多肢を使い走り出した。

「ケホッ、ケホッ。待ちなさい！！」

おかっぱが咳き込みながら叫ぶがもう俺らは夜のタマムシシティに消えていた。

## ２４話：ペンドラー（後書き）

２章は長くなりそうです。

明日は更新できないかもしれません。

あ、企画の件ですが来週いっぱいに変更します。

## 25話：ヨイヤミ

「……取り逃がしましたか」

私は忌々しいロングコートが消えた方を睨んでいましたが、虚しくなって声を漏らしました。

「すみませんね、お前達」

今回は勝機はあった。上司から借りたポケモンもいたのだ。

しかし、私はその3匹に“守る”という指示を出してしまった。

“守る”とはそれ以外の行動を捨てて、如何なる攻撃をも防ぎきる技。

しかし、さっきのロングコートの様な不意をついた攻撃には対象出来ないのだ。

完全に私の判断ミスですね。

「気にする事はないのだ、いや少しは気にしないといけないのだけど。ロングコートが出てくるなんて誰もが予想しなかったのだ」

「そうだゾ、それにまだ任務は失敗してないゾ。まだ目標を連れ去るチャンスはあるゾ」

「お前達っ！！」

おぉっ……私は何と部下に恵まれたのでしょう。
私は2人と熱い抱擁を交わします。

――ガチャン。

あぁ！！男三人が道路の真ん中で抱き合ってるなんて、気持ち悪い限りですが、今はそんな事構ってられません。

――ガチャン。

今はこの愛すべき部下達を……。

――ガチャガチャ……ガチャン。

……何ですかね？さっきからこの何か重いものが地面に落ちるような音は。

私はゆっくり目を開けます。
あれ？なんで私達のポケモン達が脅えているのですか？
嫌な予感がして、恐る恐る後ろを振りかえると……。

「バァァァァァン！！」
「ドォォォォオン！！」
「ゴゥラァァァァ！！」

自分達の身体の一部でしょうか？硬質な物体を音たてて外していく
3匹のポケモン達。

「ヒィィィ」

情けない話ですが私は腰を抜かしてしまいました。
だって、つい先ほどまで重量級に反しない見た目だったポケモンがシャープな流線形に変わっているんですから。
3匹はお互い顔を見合わせてから頷くと、物凄いスピードで夜の町へと消えていきました。
「……ハハハ、どうやら逃がしたのが不服だったみたいだね」
呆気に取られていた私達3人を現実に引き戻したのは聞き覚え……いえ、聞き慣れた声でした。
「ヨイヤミ様っ！？何故この様な場所に？」
声の主は私達の上司であり、ロケット団幹部、そして先ほどの3匹の持ち主であるヨイヤミ様でした。
いつもと変わらぬ、ニコニコと楽しそうな笑顔を携えたこの御方は私へ手を差し伸べてくれました。
「大丈夫だったかい？“彼ら”は負けず嫌いだからね。逃げられたのが許せないんだろう」
私が恐る恐る伸ばした手を掴んで、起こしてくれたヨイヤミ様。
あぁっ……何と素敵な上司様でしょうか。
任務を失敗した私を助け起こして下さるなんて。

「ヨイヤミ様？さっきのは何なんだな？まるでフォルムチェンジみたいに、まるっと姿が変わったんだな」

「あの3匹はフォルムチェンジしない筈だゾ？」

部下の声で我に返ります。またトリップしていたようです。

「ん？あれはロックカットって技だよ。君達も知っているだろう？」

「ロックカットとは、確か自分の身体についた余分な甲殻や鎧を除去してスピードを上げる技ですね。でも彼処まで見た目に変化は起こらないのでは？」

私は素朴な疑問をぶつけました。ヨイヤミ様はいつもと変わらぬ笑みを浮かべたままゆっくりと口を開きました。

「彼らは特別なんだ、最低限の耐久性を残し残りを全て除去する。言わば最強と最速を操るポケモンさ」

ヨイヤミ様はニコニコと3匹が消えた方へ視線を送っていました。

## 25話：ヨイヤミ（後書き）

昨日、一昨日と更新できずすみませんでした。

そして新キャラ登場。

これからお世話になる敵キャラです。

## 26話：ユキナリ

今、俺らはタマムシシティを爆走中だ。
巨大な身体を持つペンドラーがこうして悠々と道路の真ん中を走れるのは、夜で人通りが少ないからだな。
俺は後ろで高速で流れていく町並みを眺めているじいさんに声をかける。
「んで？じいさん。何処まで連れてきゃ良いんだ？」
「ナナシマじゃ」
「はいはい、ナナシマね……ってちょっと待て！！」
思わず頷いちまったぞ。
このじいさん何抜かしてやがるんだ？
俺は深呼吸して落ち着いてから、ゆっくりと口を開いた。
「此処は何処だ？」
「タマムシシティじゃな」
「んじゃあ、ナナシマの位置は？」
「カントーとジョウトの丁度間の位置じゃな」
「ん、そうだ。明らかにちょっとその辺までの定義を超えてるよな

？」

「いやぁ、ワシがナナシマに行く予定があっての、護衛がてら送ってもらおうかと」

「断る。俺はじいさんの道楽に付き合える程暇じゃないの」

俺は追手が来ない事を確かめると、適当な所でペンドラーに減速を指示する。

てか、金が貰えるからじいさん助けただけで、じいさんに付き合う通りはない。

「……残念じゃな。この謝礼金を上乗せして、別途で報酬も払うんじゃがのぉ」

……ピタッと俺の動きが止まる。

……“報酬”……だ……と？

「仕方無いのぅ、適当な便利屋にでも頼むとしよう。腕の良い便利屋を知らないかのぅ？」

「1人知ってるぜ……」

「おおぅ、ではその人物に会わせてくれぃ」

「……俺だ」

俺の言葉を待っていたかのように、じいさんはは笑った。

「やはり、君は便利屋じゃったか。先ほどワシを逃がしてくれた際に場慣れしておると思っておった」

「んな事はいいから仕事の話しようぜ、仕事の」

俺は笑い続けるじいさんを急かす。

「そうじゃった、そうじゃった。内容はナナシマまでの護衛、ナナシマの案内、ナナシマでの護衛じゃな。移動費用はワシが負担しよう」

つまりはじいさんを護衛しつつナナシマを案内すりゃ良いんだな。
ナナシマには詳しくないが、ガイドブック見ながらならイケるだろ。

「了解だ。あぁ、そう言えば何でロケット団に追いかけられてたんだ？」

ずっと気になっていた事を尋ねる。
ロケット団は自分達の利益になることしか行わない。
じいさんが追われてる理由が分からない。

「それはワシが可愛いからじゃろ」

「はいはい」

可愛いってのはクチートの事を言うんだっての。
しかし、このじいさん何処かで見たことあるんだよなぁ。

俺の視線に気づいたじいさんは何故か顔を赤らめる。

……キモい。

とりあえず、ペンドラーの頭の上ではしゃぐクチートを見て目を清めよう。

「……じいさん名前は？依頼人の名前は知っとかないとな」

「ん？ユキナリじゃ」

「じゃあユキナリさん。ナナシマへはクチバシティから船が出てたと思うが……クチバシティへ行けば良いんだな？」

「うむ、頼む。此が船の出航時間じゃ」

じいさん……もとい、ユキナリさんから手渡されたメモを受けとるとペンドラーに加速を指示した。

## 26話：ユキナリ（後書き）

遅れたぁっ。
やはり自分で書くのより文章を練るのに時間がかかりますね。
3日に一回のペースを目標に頑張ります。
あっ、サブタイトルの匹を話にを変更しました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5189o/

便利屋の気だるい日常。

2011年1月3日16時28分発行